英霊さん大集合だ、わいわい

ソウソウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある個性に目覚めた少年が英霊さん達とあんなことやこんなことをしながら、ヒーローを目指すだけの話。

目次

—1—『約束された勝利の剣』——1
—2—『この世ならざる幻馬』——8

―1―『約束された勝利の剣』

◇◇◇

――”ヒーロー”。

現社会において絶対的な正義。

悪を打ち滅ぼす存在であり、それだけで人々は心から安堵する。

一昔前では少年達がこぞって夢見たそれも今では手の届く範疇にまで来ていた。

ただし、全員がそうだとは限らない。

”個性”……その者独自が行使可能とされる普通の人ではなし得ない力。炎を出したり、空を飛んだり、異常な筋力を持ったり、と。

個性の殆どは遺伝性により決定される。これが残念ながら、どれ程調べようが、詳細は曖昧なまま。

だが、一つ判明した事もある。

例外も少なからず存在するのだ。

その場合、特に多いのが個性が無い、つまり”無個性”と一般的に診断されたパターンだ。

個性の引き継ぎや発現はあくまで遺伝から、のみ。生命が誕生した瞬間にだけ受理される力。それがないと言うのなら、ない他に道はない。

一人の少年――”英鈴志怜(えいれいしれい)”。

彼もまた無個性と診断された者。

両親がしっかりとした個性を持ちながら、医師からそう告げられた無個性の少年。

両親は勿論、彼自身も悲観した。個性あってこそ、社会では上下関係が成立するのであり、そのラインにすら着けない事実に。

――汝、我の召喚に答えよ。

だが、それは間違いであった。

彼の本来秘められた能力は特殊であった。その為、本人も含めて誰もその真実に辿り着けなかっただけだった。

時が動き始めたのは冬の終わり。

場所は――雄英高等学校。試験会場。

◇◇◇

試験会場。

「聞いてない!!こんなのは卑怯だって!!」

走る。ひたすら走る。

試験会場となった人気のない特製の市街地を駆け抜ける少女――”耳郎響香”は本番中にも関わらず盛大な愚痴を吐き出した。

雄英高等学校。通称、”雄英”。

ヒーローの通過点。

そう呼称される程、この学校には多くの有名な卒業者がいる。どれも世間で目の出を浴び続ける立派なヒーローへと成長していた。

そして、その最もたる象徴として名を上げるのは雄英高校はヒーロー界のＮｏ．１――”オールマイト”だ。

響香もまたオールマイトに憧れた一人。

やがて、幼い子供の響香の憧れの目はヒーローへと向き、高校生になろうとした今でも潰えることはなかった。

雄英高校のヒーロー試験は一般とは違う。

学科にもよるが、ヒーロー科においては他とは全く異なる採点方法に準じて合格者が決められる。

「流石に大きすぎる……!!」

響香はその雄英高校の試験、最後のテスト”実技試験”の真っ最中

にいた。
実技、と名の通り。個性を使用した実践形式のこのテストでは各挑戦者が目標とされた敵の撃破して獲得出来るポイントの総合数制度で進められていた。
開始から前半は順調だった。
多少スタートに出遅れたものの、響香の個性を存分に発揮。ライバルに遅れない最低限のポイントは獲得出来たと自負していたつもり。
問題は試験後半。
前兆はあった。
試験前の全体説明の時。一人の真面目そうな生徒がこう質問していたのだ。
――プリントに記載された四体目の存在はどうなのか、と。
口頭で説明されたのは三種類の敵が別々にポイントを持っている。それだけ。普通に響香自身も説明一切無しであったその四体目とやらには興味があった。
この時の説明担当であったヒーロー”プレゼント・マイク”はこう答えた。
――そいつはお邪魔虫だ。
響香がこの回答に疑問を抱く事はなかった。得点争いに多少の妨害が入るのは普通だと思っていたからだ。
倍率３００倍と言う、驚異的な人気を誇る雄英高校が試験者をある程度候補に絞る策として出したのには何らおかしくない。
ただし、これだけは予想外。
――巨大なのだ。それもとてつもなく。
ビルと余裕で肩を並べる程。
下から見上げてもその天辺が隠れるぐらいに金属製の物体で構築された巨大なロボット擬きが前触れもなく試験会場に降臨した。
次の瞬間。
試験者全員、誰もがパニックに陥るのは必然と言える。
そもそも個性とは言え、あくまで一人の人間に対して有利が取れるだけの個性が大多数。ましてや、試験を受けているのはまだ高校生に

なろうとしている者ばかり。個性自体もまだ完全に扱いきれてはいない。
そこに突如、現れた絶対的な天災。
逃げ惑うしか方法がない。響香もまた懸命に逃げる道を選択した。
「くっ!!」
一歩歩けば地響き。ビルを手掴みしては粉砕。鋼鉄な鎧に纏われた防御。
どう考えても、この状況を挽回する策までには至らない。
そして――
「うわっ!?」
亀裂の走る道路。出っ張ったアスファルトに響香の足が取られる。
咄嗟に受け身で怪我は防ぐものの、動きが完全に止まってしまった。
――く、来る……!!
振り向く。奴が追ってきている。
距離にして約数十メートル。少しでも稼ごうとずりずり足を動かして後ろに移動する。
絶望とはまさに、この事。
必死に抗う。無駄かもしれないけど。
まさに現在進行形で響香が諦めに気持ちが占められようとしていた。
――その時。
「あー……これを俺がやんのか……」
響香の耳に届く声。
同時に足音も聞こえてくる。無意識に確認しようとした彼女のすぐ隣を通過して歩いていったのは一人の少年。
「ちょっと!!そっちは危ない……!!」
懸命の呼び掛けも虚しく。
彼はまるで目の前の巨大な敵の存在すら認知して居ないかのように進む。
やがて、彼は響香の少し前で歩を止めた。

ゆっくりと左手を真っ直ぐ伸ばす。その刹那、白い光が彼の左手から伸びる。

光が晴れれば、響香は衝撃の光景を目にした。

――聖剣。

人間並みサイズの剣。相当の重量である筈のそれを易々と彼は振り翳す。

巨大な敵がもうすぐそこまで接近。なのに、響香は自然と彼の後ろ姿から視線を外せずにいた。

「……行くぞ、――」

彼が聖剣を両手で握り締め、構える。

と思えば、驚くことに空気が一変。空気が重いと錯覚してしまうほどに張り詰めた緊張感が訪れた。

光が聖剣に収束。

徐々に幻影が聖剣を大きくしていく。

圧倒的な力の前に響香はただただその行方を見守るしか出来なかった。

そして――

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）アアアアアアア!!!」

巨大な剣が振りかざされる。

彼の叫びに呼応して、巨大なロボットは回避行動へ移ったかのように思えたが間に合わず。

肩部分に剣が接触。衝撃波が辺りを舞う。

次の瞬間。

響香が目にしたのは――

真っ二つにされた残骸であった。

「え?」

派手な崩壊音とそれは共に崩れる。

先程の天災とは売ってかわって、響香が目にしたのは微動だにしない只の残骸であった。

地面にもまさに断裂した跡が。震え上がる程の威力に響香はつい息を飲む。

そうだ。彼は何処に。
張本人である彼を探す響香は個性の発動を解除したと思われる彼の姿を見つける。
すると、軽く服から砂埃を払った彼は座り込む響香の側に近寄ってきた。
「大丈夫か？」
「あっ……う、うん」
差し出されたその手を握った響香。
彼は手を引っ張り上げ、響香を立たせ上げる。
「じゃあ、また」
そう告げ、彼はその場を後にした。
無惨に荒れた市街地にいるとは思えないあっけらかんとした態度の彼に助けられた。
そう響香が気付くのは暫くして放送された試験終了の合図の時であった。

◇◇◇
試験からの帰り道。
「え？帰りにパフェ食べたいって？いや、食べんのは最終的に俺であってさ、普通に今月のお小遣いがヤバいんやけど……そんなのは知らない。行くぞ……そっか……」
英鈴　志怜。個性――”憑着”。

—2—　に続く（予定）。

―2―『この世ならざる幻馬』

◇◇◇

雄英高校。1年A組教室。

「はい、静かになるまで8秒かかりました。君たちは合理性に欠けてるね」

時は過ぎて。春。

新たな出逢いに胸を膨らませ、期待にわくわくを募らせた新入生が同じ教室に集った。

個性の影響か、志怜のいるこの教室は随分と主張が強い容姿をしている者が大多数を占めている。

唯一のヒーロー科。1年A組。

半端ない倍率の試験を通過した者のみが所属する選ばれしクラス。

今日が初めての顔合わせ。互いに自己紹介をしあっているその空間にいきなりその男は現れた。

「俺がこのクラスの担任”相澤消太”だ。よろしく。早速だが、お前達これを来てグラウンドに出ろ」

寝袋に身を包んだ一人の男性。黒一色のぼそぼさ髪と癖の強そうな容姿。

相澤は生徒達の質問にも有無を言わさない態度でジャージをクラス分、配布。

既に相澤の姿はない。

選択肢がない故に大人しく誰もが指示に従おうと席を立ち上がるしかなかった。

一方――その頃。

響香は斜め前の席を見ていた。

頭を垂れ、がっつり机と合わせて微動だにしない男子生徒。他でもない、入試の時に救ってくれた彼だというのは分かる。

クラスメイトが交流を深める間、彼はじっと席から動かない。個性の影響なのか、それとも性格によるものなのかは分からない。

が、ぞろぞろと教室から外へ移動するとなり、流石に置いていく訳

にも行かなかった響香は彼の席へ近寄り、肩を揺らす。
「おーい。もうそろそろ起きないと置いてきぼりに――――」
「ん？あんれ？誰もおらん……」
幸い、眠りは浅かったらしい。
目を擦りながらも半目で教室を見渡す彼に響香も黙って見守る。
「あれ？君は？」
「ウチは”耳郎響香”。入試の時、助けてくれてありがとうね」
「入試……あー、あん時の。どうもどうも。ところで、なんで誰も居らんのかな？もう放課後？」
「先生が外に出ろってさ」
「そっか。なら、俺らも早く行かんと。起こしてくれてサンキューな」
彼が席を立つ。
「あ、あのさ！」
「うん？」
「名前……聞いてもいい？」
「俺？あっ、そう言えばちゃんと言ってなかったか。俺の名前は――――」

◇◇◇
グラウンド。
「個性把握テスト!?」
そうだ、と相澤は断言。
全てを遮ってまで行おうとしていたのはどうやら個人の現段階での実力らしい。
雄英は校風が自由とされる。その定義に生徒も先生も関係ない。

つまり、一般的な行事でもある入学式やガイダンスがどうなろうと知ったこっちゃないという訳だ。
第一種目――――５０ｍ走。
ジャージ姿の響香や志怜は順番待ち。
現在は、白髪ボンバーの目付き鋭い男子生徒が爆発と共に地面を吹き飛ばしたところだ。
因みにテストの中身は単なる体力測定。
個性解禁のおまけ付きだが。
「おっ、ようやく動いたか」
志怜の元に一人誰かが近寄ってくる。
その者は大柄の体格に触手のようなもの。さらに先端には目玉付き。個性強すぎな容姿だった。
一応、軽く頭を下げておいた志怜。
「”障子目蔵”だ。同じクラス同士よろしく頼む」
「英鈴志怜って言う。適当に呼び捨てでも構わんよ。こっちこそよろしく」
友情の証として、握手を交わす。
「てか、動いたって何だ？」
「ずっと寝てたのかは分からんが机と一体になったままだっただろ。そのせい」
「それは仕方ない。昨日、夜更かししてもうたからな。普通に眠かった」
「え？もしかして、高校が楽しみ過ぎて寝れなかった……とか？」
響香が会話に入ってくる。
「いや、違うけど。いつもの夜更かしってやつ。今回は予想外に苦戦してしまってな……止めときゃ良かった」
「あっ、そうなんだ……」
楽しみにしてたのは自分だけ。
響香は勝手に一人恥ずかしくなっていた。
「苦戦って……ゲームでもしてたのか？」
「ん？そりゃあ――――」

「次、英鈴志怜。お前の番だ」
と、絶妙なタイミング。
志怜の台詞を遮るかの如く、相澤の呼び声が掛かってしまった。
出番が来た彼はそそくさと測定の位置に着く。
普通の人と変わりない姿。でも、入試を突破してきた強者なのは違いない。
そして、響香は彼の個性を使用した現場を直で見ている。半端ない威力であった。
クラスメイトもまた彼の個性には興味があった。結果的に彼の記録にあちこちから期待が寄せられていた。
――始まった。
「……7秒15」
――記録、普通だった。
「個性は使わなくて良いのか？」
「大丈夫です。むしろ、こんな所では使えないですので」
「そうか」
相澤もそれ以上の追求はせず。
出番を終えた彼はその場から逃げるようにして元の居場所に帰ってきた。
「……」
「……耳郎さん？どうしてそんな蔑んだ目を向けてらっしゃるのでしょうか……？」
「ウチは知ってるから。志怜が個性を使えば、もっと記録を伸ばせた事」
「何？そうなのか？」
「うん。この目で見た」
「訳有りなんだ。察してくれ」
すまん、と手を合わした彼。
この現代社会において、個性は人間の価値を表すステータスの働きもする。
「……ごめん。余計な詮索はご法度だった」

「気にしてないよ――――え？嘘だよな？」
「えっ、え？ど、どうしたの？」
「何も言ってないが……」
彼が唐突に慌てた。
再度確認するが、特に会話にそんな返答をする内容はない。
「す、すまん。今のは二人には関係のない話。気にしないでくれ」
「ホント何？」
「分からんが、個性関連だろうな」
「その通りとだけ言っておくわ」
「でも、志怜、良いのか？」
「何が？」
目蔵が深刻そうに伝える。
「このテストで最下位をとった生徒は除籍にすると担任が言ってたぞ」
「う、嘘やん……」
テストはまだまだ続く。

◇◇◇
グラウンド。
「志怜の奴、不味くないか」
目蔵がそう言う。
そんな結論に辿り着くのも無理もない。彼はこれまでの測定種目全てにおいて無個性のまま挑んでいたからだ。

同じように無個性で記録に挑んだ者も別にいたが、その者はソフトボール投げで個性を解禁し、見事に一位を獲得している。
「うん、ここまで来たら、むしろどういう個性か気になる」
響香の個性は”イヤホンジャック”。
音に突飛つした能力であり、プラグ代わりとなった耳たぶを使用する。攻撃は勿論、些細な音も拾う感知機能も備えている。
目蔵の個性は”複製腕”。
触手の先端に身体の部位を複製する。作られた部位は通常よりも強化されており、本体に悪影響も及ぼさない優れもの。
他のクラスメイトも少なからず一度は個性を使用済み。中には、測定不可能な記録を叩き出した生徒もちらほら。
「最後は……体力勝負かぁ」
最終種目――持久走。
不安要素しかない種目。
ただし、今回は個性有りなので人によればとてつもない記録が出ることは違いない。
今回、全員が一斉に走ると記録が取れないのを理由にクラスを半数に分けて前半後半で行われることになった。
志怜は前半組に入った。
「耳郎はどう見る？」
「本人はやる気十分のようだけど、どうだか」
スタートラインで準備体操に念を入れまくる彼。現在の彼の順位は下から五本の指には入るぐらい。
そろそろ高順位に入って欲しい。さもなければ、最下位争いに巻き込まれて挙げ句の果てには除籍。
なのだが、そう簡単には問屋が卸さない。
推定順位一位――”八百万百”。
彼女もまた前半組。しかも彼の隣を陣取っいる。
タイムはあくまで前半組と後半組合わせての判定となるが、強敵と一緒にいるというだけで心構えも変わってくると言うものだ。
「英鈴さん……でよろしいでしょうか？」

「ん？合ってるよ」
「なら、良かったです。よろしくお願いしますわ」
「ん。よろしく」
心配は杞憂だったようだ。
軽く紹介を交わす二人に緊張の様子はない。
「英鈴さんは個性は使わないのでしょうか？」
「んー……分かってる。分かっては居るんだけど、なかなか使いどころが難しくてな」
「そうですか……それほど扱いに癖のある個性なのですね」
「そ、そうやね。まぁ持久走は使うつもりやから一位は確定」
「言いますね。私こそ負けませんわ」
バチバチと散る火花。
準備も完了したのか、相澤が所定の位置に着いた。前半組全員の目付きが変わる。
――パァン!!
合図が切られる。
スタートダッシュを見事に決めたのは百。個性を使い、バイクを精製した彼女は悠々とトップに躍り出た。
数十秒しても状況に変化なし。
他のクラスメイトも懸命に後を追おうとするが、人力とエンジンでは流石に力の差が歴然としている。
またしても首位は彼女の手に。
観戦している後半組の誰もが共通して認識してしまう程その差は大きい。
――ラスト、グラウンド一週。
百がトップを独走。
このままでは何もなく終わってしまう。彼の活躍を期待していた響香も目蔵も内心では諦めがちなムード。
因みに彼は最後から四番目の順位で走っている。
百が最後の直走ゾーンへ突入した。
もはや逆転は不可能。

誰もが諦めへと行くその時――――異変が起きた。
「な、何!?」
「これは……鳥の声か!?」
響香が異変を察知。続いて、目蔵もまた強化された聴力で情報を集める。
グラウンド全域に木霊する甲高い鳴き声。
声の主はどんどんと大きくなり、やがて彼等の前に出現したのは――――
まるで――――グリフォンのような生物。
人間を優に見下す巨体。羽ばたけば、風が舞い上がる巨翼。馬のような四本足。ギロリと全てを見据えたかのような目。
現実に存在しない架空の生物が出現した。
「う、嘘……だろ!?なんだよ、あれ!?」
「何処から来たんだ!?」
派手に目立つ仁王の姿。
グラウンドを走る他の生徒にも自然と関心がそちらに寄ってしまう。
巨大なグリフォンはやがて、走る生徒のグループの頭上を飛翔して並走を始めた。
そして、驚くことに誰かがグリフォンの背中に飛び乗った。
「あれ……志怜が呼んだんだ……」
響香の目に写る非現実の光景。
個性を封印してきた彼が夢の生物グリフォンの背中に立っている。現実なのか疑いたくなるが、正真正銘、現実だ。
よく見れば、彼の服装にも変化がある。王族が着ているようなローブに腰には長剣を携えていた。
「このまま一直線だ。ヒポグリフ」
グリフォンも志怜を主人と認識しているのかすんなりと彼を背中に乗せた。そして、その巨体を軽々持ち上げ、宙へと飛び上がり一気にゴールへと突き進む。
最後尾付近の彼を乗せたグリフォンが怒濤の速度で通り越し、カー

ブを殆ど速度を落とさずに曲がりきる。
前を走る生徒を目にくれず、ガンガンと追い抜いてしまう。
そして、そのまま一気に彼は――――
「そんな!?」
百すらも抜いて、成績一位でゴールした。

――3――へ続く。